

# 棚田学会通信

第20号 2006年11月14日

発行/棚田学会

〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



長崎市外海地区の大中尾棚田

- ◆巻頭言：長崎市長 伊藤一長 ..... 2
- ◆各地のニュース
  - ①「韓国の棚田現地見学会報告」今井英輔（東京都府中市） ..... 3
  - ②「山古志の棚田現地見学会報告」野村一正（棚田学会理事・農林中金総合研究所） ..... 4
- ◆日本の棚田百選
  - ・静岡県浜松市大栗安の棚田 鈴木芳治（大栗安棚田倶楽部代表） ..... 5
- ◆大会について
  - ① 会長開会挨拶 「安心の砦」としての棚田 木村尚三郎 ..... 6
  - ② 「シンポジウムに参加して」 出田和久（棚田学会理事・奈良大学） ..... 7
  - ③ 平成18年度予算、年間計画、新理事紹介 ..... 8



## 巻頭言

### 「大中尾棚田」～県庁所在都市 「長崎市」で光を放つ資源

長崎県長崎市長 伊藤 一長

「大中尾棚田」の起源は古く戦国時代から江戸時代と言われております。この先人たちが残した歴史的遺産、また四季折々に美しい風景を見せる「大中尾棚田」を、私たち長崎市は平成17年1月4日の市町村合併により、貴重な地域資源として旧外海町から受け継ぎました。

近くに水源がないことから山奥の約4.2kmも離れた神浦川上流から水路を造り、1枚1枚の田んぼを開墾したと聞いております。現在では一部が昭和44年に建設された神浦ダムの底に埋没し、田の枚数は300枚となっております。「大中尾棚田」も旧外海町時代の平成11年、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定されました。

平成14年には、耕作者の方々により「大中尾棚田保全組合」が組織され、棚田を次世代に引き継いでいくために、会長をはじめ日々奮闘されております。保全組合ではまず、長崎県下で初めての棚田オーナー制度に取り組みました。組合内に設置した棚田オーナー部を中心に、苗づくりから田植え、草刈り、稲刈り、脱穀・精米と、年間を通じた精力的な活動を行い、オーナーの方々に非常に好評で、リピーターも多く、また新たなオーナーも増えております。田植え、稲刈り等の際には、都市住民のオーナーと保全組合会員との心温まる交流風景が見られ、棚田を通じて芽生えた新たな息吹を感じさせます。また、稲穂が実る初秋の時期には、案山子コンテストを開催、地域一帯の「神浦散歩未知（このうらさんぼみち）」という地域活性化イベントの一環として、棚田地帯でコンテストの表彰式をはじめ手作りのイベントを行い、多くの案山子が来訪者の目を楽しませております。

本年は新たな企画「棚田フォトコンテスト」を開催したところ、棚田が見せるさまざまな顔を求め地域内外から多くの撮影者が集まり、棚田周辺も例年にない賑わいを見せました。

さて、この「大中尾棚田」を有する本市で、平成20年の全国棚田（千枚田）サミットを、同じ長崎県下の雲仙市と共に開催することが決定いたしました。本市としましても、歴史的遺産である棚田の保全を広くアピールするサミットの開催は、大いに意義のあることと理解しております。

共催の雲仙市は温泉地・保養地として有名な地でもあります。このサミットを今回雲仙市と共に開催ができますことを、大変光栄に感じております。

長崎市は、日本の西の端に位置しておりますが、江戸時代、西洋に唯一開かれた貿易・文化の窓口として栄え、異国情緒豊かな観光都市、また、被爆地として世界恒久平和を訴える国際平和文化都市であります。また、「大中尾棚田」の位置する外海地区には、キリシタンにまつわる史跡、遠藤周作文学館など多くの地域資源が存在します。この機会に、ぜひとも長崎市まで足を運んでいただき、棚田保全の意義を共に確認しあうと同時に、叙情的な「大中尾棚田」の風景、遠藤周作氏の代表作「沈黙」のモデルとなった地で感じられる荘厳さ、幽玄さをじっくり味わっていただきたいと思っております。

また、本市は今年4月1日から10月29日まで、日本ではじめてのまち歩き博覧会「長崎さるく博'06」\*を開催し、県内外からも多くの観光客の方々を集めました。お陰様で大好評のうちに終了しました。「大中尾棚田」をはじめ、市内の街かどの至るところにあふれている歴史的な観光資源を掘り起こし、市民ガイドの楽しい説明を聞きながら観光するという「通さるく」という新たな観光ツールに取り組みました。

また、本市は市町村合併を契機に、平成17年度を「農水産・地産地消元年」として位置づけ、農林部内に「地産地消推進課」を設置し、地産地消の啓発活動、ながさきの「食」推進の取り組み、学校給食への地元野菜の導入など、地産地消に関わる多くの事業を展開しております。また、長崎市街地から外海地区までの国道沿いには「道の駅夕陽が丘そとめ」を今年4月にオープンさせ、併設する直売所には、棚田米をはじめ、地元農家が生産する野菜・惣菜などが並んでおります。

今後は雲仙市と共に皆様をサミットへご案内するために調整を進めていきたいと思っております。開催にあたりましては、日頃から棚田保全にご尽力なされている多くの皆様方からご支援、ご指導を賜ることと存じますが、どうかよろしく願い申し上げます。

サミットで皆様とお目にかかれることを、心から楽しみにいたしております。

\*「さるく」は長崎地方の方言で、「ぶらぶら歩く」という意味です。「長崎さるく博'06」は建物がない博覧会として企画され、公募に応じた一般市民がボランティアで、長崎市内の名所旧跡や市民が誇る風光明媚な場所などを多くの来場者に案内しました。



## 各地のニュース

### 韓国の棚田現地見学会報告

東京都府中市 今井英輔

2006年6月15日～18日に棚田学会17名が韓国の棚田現地見学会を行いました。

その報告をさせていただきます。下記の写真は韓国の最南端の慶尚南道・南海郡・加川 (Gacheon) マウルの棚田です。向かいは九州です。マウルとは集落を意味します。



#### 1. 加川 (Gacheon) マウルの棚田で田植え体験

加川 (Gacheon) マウルの棚田で田植え体験をしました。日頃、教鞭を執る先生方も田圃に入り楽しい田植え体験をしました。写真は田植え用の作業衣を着た中島副会長の田植えの模範演技です。

尚、棚田現地見学会で田植え体験を行ったのは初めての事です。



#### 2. 韓国の棚田は愛の棚田です。

韓国の棚田では若いカップルを多く見かけました。日本では見られない風景です。

日本でも若いカップルが棚田でデートが出来る魅

力的な場を創造したいものです。加川のマウルの棚田には一枚一枚、その形状に似せた名前を付けています。私たちが田植え体験を行った田圃には「日韓・愛の棚田」と命名させて頂きました。

#### 3. 日韓棚田セミナーの開催

南海 (Namhae) 郡農業技術センターを訪問し、日韓棚田セミナーを開催しました。

韓国側からは南海郡農業技術センターの Lee Gyeong-hee 係長による「南海郡棚田保全活動について」、日本からは東京農工大学の千賀教授による「日本の棚田保全活動の経緯と実態」について講演がありました。熱心に質疑応答がありました。会場の入口には「歓迎 日本棚田学会 訪問」の幕が飾られていました。

#### 4. 田舎市場でのひと時

ここは Hwagae-jangteo の田舎市場でのひと時です。市場では食料品、日用品を販売しています。市場の中には食堂もあります。その食堂で鮎の刺身をつまみに韓国のお酒を飲み、韓国農村経済研究院の金泰坤博士とお昼から親睦を深めました。



#### 5. 日韓交流の食事会

韓国の各地で現地の人にお世話になりました。慶尚南道の河東郡 (Hadong-gun) では地元のガイドさんと昼食会を行いました。南海 (Namhae) では、南海郡の行政のトップである郡守さん、南海郡農業技術センター所長と同席での日韓交流の夕食会を行いました。関係者には感謝を込めて日本の棚田の写真集等を贈呈させて頂きました。

尚、夕食会后、ホテルに帰り、深夜まで学会員同士の親睦会を行いました。楽しい宴でした。

#### 6. 謝意

楽しい・素晴らしい3泊4日の韓国の現地見学会でした。会員になってまだ日の浅い私にとって思い出になりました。いろいろ事前準備をして頂いた皆様と韓国でお世話になった皆様に感謝します。次回の現地見学会を楽しみにしています。



## 各地のニュース

### 山古志の棚田現地見学会報告

棚田学会理事・農林中金総合研究所

野村 一 正

中越地震によって全村避難の大打撃を受けた旧山古志村(長岡市)では、至る所で復旧工事の槌音が響いていた。山古志の棚田も「山古志の魅力の再生と創造」計画の一環と位置づけられ、再生への一步を踏み出しつつあった。しかしかつての美しい棚田再生には、山古志に帰った人々が自立して生活できる、新たな「生業」の展開が不可欠だ。

棚田学会現地見学会は中越地震二年目目の9月9日、10日の両日行われた。旧山古志村は復旧工事真最中。まだ至る所に、地震が残した被害のつめ跡が痛々しく残っていた。

2004年10月23日午後5時56分、人口2,168人の村は直下型の巨大地震に襲われた。「家がいったん空中に浮いて、突き落とされたような揺れ」。忙しい中にもかかわらず、見学会の案内をいただいた長岡市の渡辺斉復興管理監、青木勝復興推進室次長をはじめ皆さんもその時の話には顔を曇らす。

山間丘陵地に位置する山古志は、ほぼ全村が傾斜地に立地する。日本でも有数の地すべり地帯とされてきたこの地域の山や大地は、地震によって徹底的に痛めつけられた。至る所で地滑りが発生し、道路は寸断され、河川がせき止められ、棚田も多くが崩壊した。

全村避難した村民が村に戻ることは、もはや不可能と思われた。だが、多くの村民は復村の道を選んだ。研究者等による「山古志復興新ビジョン研究会」が2005年1月に行った全世帯を対象にしたアンケート調査(回収率86.8%)によると、村に帰りたいという意思を示した人が92%を占めた。基本的にはこの帰村への強い意志が山古志復興への道を決めた。

現在、復興のための軸となっているのが山古志集落再生計画。この計画は住民が当初から参加することを基本とし、単なる復興事業にとどめず「創造的復旧」を目指すこととしている。まず失われた道路と宅地を確保し、住宅、農地を再建するなどの、いわゆる復旧事業に取り組む。そのうえで、今後も集落が自立的かつ継続的に存続するための環境整備を行うこととしている。

創造的復旧事業は主に三つの分野に分類されている。一つは農業プラス観光の新しい産業作りなど「地域社会活動の再生と新たな生業の展開」、

二つ目は中山間地としての集落景観の再生や若い人たちの定住への条件作りなど「山古志の魅力の再生と創造」、そして三つ目は中山間地型住宅の普及など「冬の暮らしの住環境問題の解決」である。

単なる復興ではない、山古志の地域資源を生かした、活力のある自立した村づくりを目指しているのである。災害を転じて活力ある村にするという意欲的なものであり、新しい村づくりとしても注目される。

山古志の持つ地域資源は多い。考えようによっては豪雪や過疎も資源となりうる。それらを総合的に捉え、新たな産業として考え、村の人々が自立して暮らしていける「生業」を生み出そうというものだ。

この事業の一環という位置づけで、山古志の重要な地域資源の一つ、棚田も復旧への取り組みが始まっている。したがって再生された棚田は、従来には無い期待を担う。「棚田を食料生産地としてだけ捉えるのではなく、地域保全の一環としても意味があることを多くの人に知ってもらう」(青木復興推進室次長)きっかけにする。つまり再生計画で棚田は「農業と観光を結合した新しい産業作り」の中に位置づけられる。かつて生活の基盤であり、山古志の美しい景観の主役でもあった棚田は、復興計画が実現すれば新たな役割が与えられることになる。

すでに動き出した山古志復興事業の持つ意味は大きい。改めて中越地震で亡くなられた方の冥福をお祈りし、被災された皆様にお見舞い申し上げるとともに、以前にも増して美しく活力のある山古志が再生することを願わずにはいられない。



新しい役割も担う錦鯉を養殖する棚田



## 日本の棚田百選

### 静岡県浜松市大栗安の棚田

大栗安棚田倶楽部 代表 鈴木芳治

天竜川の支流、清流「阿多古川」の源流近く、赤石山脈に連なる山並みの急峻な南向きの斜面に張り付くように大栗安の棚田があります。

石積み美しく棚田の下部から見上げると城壁が幾重にも重なった様に見える檜曾礼（ひのきぞれ）と、茶畑と杉・桧の林と田んぼが独特な空間を演出する本村（ほんむら）の二箇所を大栗安の棚田と称しています。

平均標高 425m、棚田等の枚数は 481 枚、米、茶、シキミ、蕎麦、大豆、キビなど栽培しています。小さな沢と岩の隙間からしみ出る僅かな水と雨だけが頼りの棚田で雨の少ない年は本当に苦労します。田植えの仕度が間に合わない事も多いので、いまだに苗田を作り田植えが長期に亘っても耐えられる強い苗を育てます。1a 未満の田んぼも多く手植えをしています。田植えはお茶つみの時期を避け 4 月末から最終 6 月中旬までの作業となります。稲刈りは酒米五百万石が 8 月末から、自家用米が 10 月中頃まで、高低差 100m を上から下に順々に続きます。

大栗安棚田倶楽部は平成 11 年「日本の棚田百選」「静岡県棚田等十選」の選定をきっかけに大栗安に居住する 15 戸の農家・非農家の家族で結成されました。

田植え・稲刈りには毎回 50～60 名ボランティアを受け入れ、11 月 23 日には棚田ウォーキング、年 7 回栽培体験の雑穀塾、炭焼き・しめ縄作り・田舎暮らし体験などの独自のイベントを開催し都市部の人々と交流を持ちながら棚田の保全や広報をしています。休耕田を利用して栽培される蕎麦や雑穀、大豆も味噌に加工して近くの道の駅（くんま水車の里）で販売していますがなかなか好評ですすぐ完売します。ロットが小さくたいした儲けにはなりません、共同作業の後の一杯や研修旅行が楽しみとなっています。

また、交流を通じて知り合った「遠州自然研究会」の皆さんは 3 年間にわたり大栗安に生息する植物を調査頂き 600 種を超える写真集『天竜市大栗安の棚田及び周辺の植物』を編集出版して頂きました。専修大学の松尾教授は地域に伝わる古文書を調査『延宝元年（1673 年）遠州豊田郡阿多古領大栗安村御検地水帳』を発見いただきました。大栗安の環境や歴史を語る貴重な資料を私達は得る事となりました。

私達は大栗安の棚田を大栗安の歴史を伝える文化遺産として認識し、貴重な自然、資源を保護し、後世に継承するべく、地域をあげて努力しています。今年、米農家でエコファーマーの認定を受けるよう皆で手続きしています。

遠州の奥座敷、山奥の小さな棚田です。是非一度お越し下さい。





# 大会について

## 会長開会挨拶

### 「安心の砦」としての棚田

棚田学会会長 木村 尚三郎

本日はお忙しいなか、またお暑いなか、棚田学会総会にご参集下さいまして、まことにありがとうございました。あつく御礼申し述べます。

棚田についての関心は近年わが国において大いに高まり、直接に関係のない雑誌グラビアなどにおいても、その美しい景観がしばしば紹介されるようになりました。これもひとえに皆様方のおかげと、深く感謝いたしております。

私たちは何も、昔を懐かしみ、昔をしのいで、棚田の研究、啓蒙活動を進めているわけではありません。棚田には、21世紀を生きる私たちが求めてやまない、互いに「仲間となり合う」「安心の砦」「最高の美しさ」そして「愛」があるからです。

自然災害・テロ・犯罪等が頻発し、さらに先行き不透明な不安心の今日、「安心の砦」がどうしても欲しい。自分が暮らしている「大地」への愛、互いに支え合う家族や友などへの「人」への愛、そして「くらしといのち」に不可欠な米その他の食をはじめ身の廻りの「物」への愛。この「大地」「人」「物」への愛情こそ、「安心の砦」といいでしょう。

大きな川から田に水を引く導水・灌漑技術のなかった昔、人々は山の上から下への流水を利・活用して山地を耕し、山・自然の命ずる厳しい掟に忠実に従いながら、汗と涙の結晶として棚田を作り出しました。これによって人は山を美しくし、山もこれに応えて、貴重な米を生み出しました。そこには人と自然、人と人、そして人と物・動植物との愛と共生があります。

ヨーロッパの「文化」は森を切り拓き、小麦畑や村・町に変え、自然を人間の家来として「飼い馴らす」ことから成り立っています。これとは反対に、日本の文化は飽くまでも自然に従うことによっており、不自然・反自然的な行為は、自然すなわち神によって必ずバチが当たります。

棚田には、山と人とが互いに相手を引き立て、相手を美しく幸せにするという、いい和の関係、仲間の関係があります。厳しい環境、厳しい労働を伴いながらも、愛と美しさをもっと端的な形で生み出してきた棚田。そこに私たち現代人が求めてやまない「安心の砦」を見いだす理由があります。

会員の皆様方の熱心な御参加によって、本日の総会がみごとな成果を生み、棚田学会が今後いよいよ発展していきますよう祈念いたしまして、会長としてのご挨拶とさせていただきます。

平成 18 年 8 月 6 日

この通信を編集し、10月17日に木村尚三郎さんがご逝去なされました。  
ここに謹んでご冥福をお祈り致します。



## シンポジウムに参加して

奈良女子大学文学部 出田 和久

「10年先、20年先の棚田はどうなっているだろうか？」日本の農村は僅か半世紀ほど前まで過剰人口に悩まされてきた。人々はその人口圧に対して耕地拡大を図り様々な工夫をこらしてきた。傾斜地をきり拓いた棚田はその象徴である。調査で出かけた先で目にする山間部の小盆地の景観には心惹かれることも多い。私たちの先祖が嘗々として築きあげてきた、時にはまさに耕して天に至るという形容が相応しい棚田の景観は、その土地に生きた人々の生の証であり、土地に刻まれた歴史でもあろう。しかし、同時に高齢化が進む地域の耕地（その多くが棚田ということになる）の荒廃した現状を目の当たりにするたびに、少しばかり困惑した気持ちになる。

筆者は、歴史地理学・人文地理学を専攻しているので、改正された（2005年施行）文化財保護法に文化的景観の概念が導入されたことには大に関心がある。文化的景観の導入は、棚田景観の将来に何をもちたすだろうか、そのような思いを抱きながらのシンポジウム参加であった。限られた紙数で3人の方すべてのご報告に触れ、感想を綴る余裕はないので、ここではおもに真島氏のご報告をお聞きしての感想を記すことにしたい。

「棚田の景観を読む—その価値と問題点—」と題された真島氏のご報告は、棚田景観を構成する要素にも目を向け、棚田の村の履歴書をつくって、多彩な生業のひとつとして棚田を捉えようというもので、興味深かった。たとえば、棚田の法面が石積みか土坡かによって、その技術的背景や歴史に違いがあることや近世における井堰や水路の技術がヨーロッパからもたらされた鉱山技術の転用であることなどにも触れられた。地域の生活文化を研究し、『棚田の謎』の共著者でもある氏の面目躍如といったところであろう。ムラの棚田を目にしても、石の積み方から「耕作者が徐々に積んでいったのだろうか」とか、少し立派だと「石工が積んだのかな？どこの石工だろうか？」、「いつごろ石積みになったのだろうか？」と、せいぜいこの程度にしか見ていない筆者には、広い視野の必要性を感じさせてくれた。氏が言われるように詳細に棚田の景観を観察し、さらに作業中の人に聞き取って眼に見えない部分についても知ると、農業を通じたムラの生活や社会、あるいは集団の機能なども見えてくる。と同時に、棚田を含めたムラの景観を作り上げてきた祖先の活動やその成果（＝景観）に敬意の念を抱き、石垣の一つ一つの石にまで慈しみを覚えることだろう。経済的な価値のみで、その存在理由を簡単に失わせてしまってよいものだろうかと思わずにはいられない。

そこで、何が「文化的景観」に期待できるだろうか、と思いつつパネルディスカッションに耳を傾けた。文化的景観の概念が導入されることによって、直ちに経済的価値一辺倒から危機に瀕した棚田が、保全への道を歩みだすとは思えないが、希望は見出せよう。今後、一般に文化的景観への関心が高まり、理解も深まるであろう。そして、文化的価値はそう簡単に経済的価値に換算できるものではないとして、棚田に文化的景観としての価値を見出す人が増えることを期待したい。そのために棚田学会が果たす役割があるはずであり、真島氏が述べられた棚田の村の履歴書づくりは、人々に棚田の景観に対して畏敬と慈しみの念を抱かせ、棚田の価値を認識させる有効な手立ての一つとなると思う。

### 第13回 談話会

日 時：平成18年12月2日（土） 午後3時～5時頃  
会 場：葛飾区郷土と天文の博物館（東京都葛飾区白鳥3-25-1）  
京成本線 お花茶屋駅下車

参加費：1000円（会員は無料）  
懇親会：講演後～6時（会費500円）  
問い合わせ：棚田学会事務局

会場の都合上お申込みの上ご参加下さい。



## 平成 18 年度活動計画

1. 棚田学会大会 (平成 18 年度大会:平成 18 年 8 月 6 日開催)
2. 理事会 (平成 18 年 7 月 1 4 日開催済み、臨時開催含む)
3. 研究会・談話会・見学会
4. 棚田学会誌『日本の原風景・棚田』(第 8 号)  
(棚田学会誌第 7 号:平成 18 年 7 月 31 日発行済み)
5. 棚田学会通信 (第 20, 21, 22 号)
6. 棚田学会賞

## 平成 18 年度予算

(平成 18 年 7 月 1 日～平成 19 年 6 月 30 日)

## 1) 一般会計

収入の部		支出の部	
事項	予算額	事項	予算額
<b>会費収入</b>	<b>1,780,000</b>	<b>旅費</b>	<b>200,000</b>
普通会員 400 名× 4,000 円	1,600,000	講師旅費	100,000
学生会員 10 名× 2,000 円	20,000	連絡旅費	100,000
賛助会員 16 名× 10,000 円	160,000	<b>謝金</b>	<b>100,000</b>
		<b>印刷費</b>	<b>1,520,000</b>
<b>図書販売</b>	<b>100,000</b>	会誌第 7 号 (B5、128 頁)	1,200,000
<b>前年度繰越金</b>	<b>2,355,211</b>	学会通信 60,000 円× 3 回	180,000
		大会資料等	140,000
		<b>通信・郵送費</b>	<b>500,000</b>
		会誌発送費 (第 7 号)	100,000
		学会通信発送費 (20,21,22 号)	200,000
		郵送費	50,000
		通信費 (電話, FAX, 切手代等)	150,000
		<b>ホームページ運行費</b>	<b>50,000</b>
		<b>会議費</b>	<b>200,000</b>
		理事会、編集会議他	200,000
		<b>会場設営費</b>	<b>250,000</b>
		大会	150,000
		談話会	100,000
		棚田学会賞基金へ	80,000
		消耗品費	35,211
		予備費	1,300,000
<b>合計</b>	<b>4,235,211</b>	<b>合計</b>	<b>4,235,211</b>

## 2) 特別会計

収入の部		支出の部	
事項	予算額	事項	予算額
<b>棚田学会賞基金募集予定</b>	<b>1,920,000</b>	<b>棚田学会賞</b>	<b>35,000</b>
一般会計より	80,000	賞状、盾制作費	35,000
		<b>旅費交通費</b>	<b>200,000</b>
		次年度繰越金	1,765,000
<b>合計</b>	<b>2,000,000</b>	<b>合計</b>	<b>2,000,000</b>

## 棚田学会理事会の紹介

会 長	木村尚三郎 (東京大学名誉教授)	石塚 克彦 (劇団ふるさときゃらばん脚本・演出家)
副 会 長	中島 峰広 (早稲田大学名誉教授)	
事務局長	大島 暁雄 (元文化庁主任文化財調査官)	牛島 正美 (全国町村会経済農林部部長)
理 事	出田 和久 (奈良女子大学文学部教授)	小川 直之 (國學院大學文学部教授)
	海老 澤衷 (早稲田大学文学学術院教授)	小坂 清治 (恵那先史文化研究会会長)
	木村 和弘 (信州大学農学部教授)	佐藤藤三郎 (農民作家)
	佐々木卓也 (石垣を讀める会代表世話人)	高橋 久代 (劇団ふるさときゃらばん)
	千賀裕太郎 (東京農工大学農学部教授)	橋本 直子 (葛飾区郷土と天文の博物館学芸員)
	野村 一正 (農林中金総合研究所顧問)	原田 津 (農事評論家)
	服部 英雄 (九州大学大学院教授)	広田 純一 (岩手大学農学部教授)
	春山 成子 (東京大学大学院助教授)	安井 一臣 (バイオクロップサイエンス(株)研究開発技術顧問)
	水谷 正一 (宇都宮大学農学部教授)	山岡 和純 (農村工学研究所用水管理研究室室長)
	矢野 学 (新潟県上越市議会議員)	
	山路 永司 (東京大学大学院教授)	
監 事	田淵 俊雄 (元東京大学教授)	三輪 嘉六 (九州国立博物館館長)